YOMIURI SHIMBUN, June 27, 1

Founded 1874
Daily Circulation:
15.5 million copies
(World's largest)

虐殺のカンボジアからホワイトハウス高官に

"From the Killing Fields of Cambodia to the White House"

夢実現したシブ氏

十三年前、〝虐殺のジャングル〟から難民としてアメリカへ逃れた一人のカンボジア青年が、大統領補佐官代理の要職に就いた。ホワイトハウスの中で、アジア系アメリカ人がこれまでに得た最高のポストだ。シチャン・シブ氏、四十一歳。カンボジア脱出行、日本人からの援助、ニューヨークのタクシー・ドライバー生活、そして、ホワイトハウス入りへ道を開いたブッシュ大統領選挙キャンペーンとの幸運な出会い……。劇的な体験を重ねて今の地位に昇りつめたシブ氏を、全米マスコミは、現代のアメリカン・ドリームの象徴、と称賛している。（ワシントン・水島敏夫特派員）

オフィスでスタッフと談笑するシチャン・シブ氏（左）（藤原健特派員撮影）

「コンニチハ」。執務室、なじみ深い日本語で、日本語で話しかけてきた。大柄で人なつっこい目。室内には、星条旗と、カンボジアのシンボル、アンコール・ワットの写真が〝同居〟している。日本語はプノンペン大学で学んだもので、激務の合間に、今でも教科書を開く。

国民の声伝達

シブ氏はさる二月、ブッシュ政権発足と同時に、大統領補佐官代理（渉外担当）のポストについた。消費者団体、難民グループや様々な少数派グループなどの政策要求を大統領に伝え、同時に、大統領の考えや政策方針を各団体に説明するのが主な仕事。週に少なくとも一回、大統領と会って意見交換する。年俸は六万五千ドル（約九百十万円）だ。

「死を何度覚悟したかわかりません」。シブ氏は、虐殺の恐怖から逃れたさる七六年二月までの体験を、こう切り出した。

決死の脱出行

シブ氏はプノンペン大学で法律を学んだあと、高校教師の道を選んだ。七五年四月、共産軍によるプノンペン陥落。国外脱出をはかり、米国大使館の最後の避難ヘリコプターに乗る手はずを整えた。「自分だけが逃げるのだから、戦火に苦しむ同胞に、せめて最後の手助けをしていきたい」と思った。ギリギリまでコメと医療品を届ける作業を続けたが、これが手間取り、わずか三十分の差でヘリに乗り遅れた。

数日後、共産軍は、市民に農村への強制移動を命令。母親ら家族と共に強制労働キャンプに送られた後、ここを一人で脱出。「母はその時、父の形見の指輪を私に与え、〝仏教の功徳によって生命が守られますように〟と祈ってくれました」

しかし、タイ国境まで二十四キロのところで逮捕され、再び強制労働キャンプへ。七六年二月まで八か月間、死の恐怖と戦いながら、一日十八時間の土木作業が続いた。ここでは、トラックの積み荷にもぐり込み脱走に成功。しかし、タイ国境を越えたところで、今度は不法入国でタイ当局に逮捕された。

恩人は日本人

その時、シブ氏は、大学時代、日本語を習った山田基久さん（五二）（現国際協力サービスセンター勤務）がバンコクの日本大使館広報センターに転勤していることを思い出し、助けを求めた。身元保証人を喜んで引き受けた山田さんは、十か月間の逃亡、強制労働で疲労の極にあったシブ氏に自宅を提供した。

脱出行が続いていた間、母親をはじめ家族親類合わせて十五人が殺された。

七六年六月、アメリカにコネチカット州のリンゴ園で働き、ニューヨークでタクシー運転手もした。コロンビア大学に入学し国際関係学で修士を取った。そして八二年、米国市民権取得。

ニューヨークの国際教育研究所に勤務しながら、大統領の選挙キャンペーンに加わった。誠実でエネルギッシュな働きが報道関係者やデービッド・デマレスト氏（現大統領補佐官）の目にとまり、一月、彼の下で働くよう強く誘われた。

太平洋の代表

「規律と自己犠牲と思いやりに満ちたアジア系アメリカ人が、アメリカの理想を高く掲げて活躍している。その代表が、カンボジアのキリング・フィールドからアメリカに渡ったシブ氏である」。ブッシュ大統領はさる五月八日、アジア・太平洋系アメリカ人週間で行った演説の中で、シブ氏を名指しで称賛した。

「ブッシュ大統領は、二十一世紀がアジアと太平洋の時代になるのを十分認識しているそれに合わせて、能力のあるアジア系米国人の活躍の場はもっと増えるだろう。日系人も政治的な発言力が強くなる」と、シブ氏は期待をふくらませる。

アジア系アメリカ人は、二〇〇〇年には現在の二倍半、約一千万人にふくれ上がると予想されている。